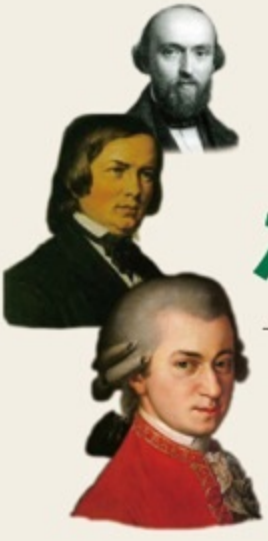
北村智恵先生によるピアノセミナー　No.18

楽譜は たのしい!



― ビフォー アフター「へ～、そうだったのかァ」―

楽譜に書かれた作曲家のメッセージを深く正確に「読み取る」力をつけるには、どのように勉強したらよいのでしょう。
「譜を読む」力がつけば、耳慣れた音楽の本来の響きに耳と心を傾けることができ「へ～、こういう曲だったのか」と、演奏が変わってきます。レッスンでよく使う曲を例に、リズムと音を読むだけではない本当の意味での「譜を読む」ということがわかる講座です。

ベッツォルト	メヌエット ト長調・ト短調
クレメンティ	ソナチネ ハ長調 op.36-1
クーラウ	ソナチネ ハ長調 op.20-1
モーツァルト	ソナタ ト長調 K.V.283 第 1 楽章
	ソナタ イ長調 K.V.331 第 3 楽章「トルコ行進曲」
ベートーヴェン	ソナタ ヘ短調 op.2-1 終楽章
	エリーゼのために
ツェルニー	30 番練習曲より 第 28 番
ブルクミュラー	すなおな心・アラベスク・コンソレーション
ショパン	ソステヌート
シューマン	「子どもの情景」より 1. 見知らぬ国と人びとについて
	7. トロイメライ
ル・クーペ	ピアノの練習 ABC より　C・3・D・4
バダジェフスカ	乙女の祈り
プロコフィエフ	行進曲

講師 北村智恵

ピアノ指導、楽譜の監修・校訂、作・編曲、CDの楽曲解説やコンサートのプログラム、ノート、新聞、音楽雑誌への執筆等、長年に及ぶ。和愛大学「ピアノ教授法」「音楽学演習」講師。全国各地でピアノ指導者のための講座・公開レッスンの講師をつとめる一方、学校関係や、教育セミナーの講演も多い。音楽教育図書、ピアノ曲集など著書多数。また、2004年に出版された「ピーターラビットピアノのホ」(全音)は、その指導上の工夫や画期的な内容が専門家の間で高く評価されており、2014年4月、内容をより充実させ新たな装丁でリニューアルされた新訂版「ピーターラビットと学ぶはじめてのピアノ教本」(全3巻)が、(株)パナムジカより出版されている。

2017年

11 月 28 日 (火) 10:30～12:30

カワイ梅田 コンサートサロン "ジュエ"

大阪市北区梅田1丁目1-3　大阪駅前第3ビル1F　TEL 06-6345-8300

一般 4000円　会員 3500円 ※ちえの輪倶楽部会員・賛助会員

＊楽譜は必ず指定の版をご持参ください。(裏面をご覧ください)
＊曲数が多いため、全曲の資料楽譜集を実費にてご用意いたします。
　ご希望の方はお申し込み時にその旨お伝えください。(300円)

お問い合せ・お申し込み

【ちえの輪倶楽部】
TEL&FAX 0774(86)2370
MAIL chienowaclub@mac.com(はなだ)

【ムジカ工房】
TEL 072(689)0727
FAX 072(687)0314
MAIL info@musicakobo.com

【カワイ梅田】
TEL 06(6345)8300(一般のみ)

主催　ちえの輪倶楽部　〒569-1031 大阪府高槻市松が丘2-7-22　TEL 072(689)0727　FAX 072(687)0314 (ムジカ工房内)
MAIL chienowaclub@mac.com　URL http://chienowaclub.musicakobo.com

楽譜はたのしい！

― ビフォー アフター「へ～、そうだったのかァ」―

＜　講座で取り上げる曲目とエディション　＞

ベッツォルト　メヌエット ト長調・ト短調
"アンナ・マグダレーナの音楽帳"より
モーツァルト　ソナタ ト長調K.V.283第1楽章
ソナタ イ長調K.V.331第3楽章「トルコ行進曲」
ベートーヴェン　ソナタ ヘ短調op.2-1　終楽章
シューマン　子どもの情景op.15より
「見知らぬ国と人びとについて」「トロイメライ」
＊以上原典版(ウィーン原典版　ヘンレ版など)

クレメンティ　ソナチネ ハ長調op.36-1　全楽章
クーラウ　ソナチネ ハ長調op.20-1　全楽章
＊ソナチネアルバム第１巻 初版及び初期楽譜に基づく改訂版
今井顕校訂版(全音)

ブルクミュラー　25の練習曲op.100より
「すなおな心」「アラベスク」「コンソレーション」
＊北村智恵校訂版(全音)

ショパン　「ソステヌート」
＊"ショパンへの道" (音楽之友社)

楽譜は必ず指定の版をご持参ください

＊以下の楽譜は版不問
ル・クーペ　ピアノの練習ABC op.17より C・3・D・4
ツェルニー　30番練習曲op.849より 第28番
ベートーヴェン　バガテル イ短調「エリーゼのために」
バダジェフスカ　「乙女の祈り」
プロコフィエフ　子どものための音楽op.65より「行進曲」

曲数が多いため、今回の資料楽譜集を実費にてご用意いたします。
ご希望の方はお申し込み時にその旨お伝えください。(300円)

特別展示
「楽譜から聞こえる作曲家の思い」

「エリーゼのために」など、作曲家の自筆譜(コピー)を展示します。
それぞれの作曲家の思いが聞こえてきます。

楽譜の重み

「ほら、ほら、だめでしょ！　そんなふうに入れるとページがめくれたり表紙が折れたりして、本が早くいたんでしまうのよ。ページをめくる方を手に持って、背表紙のほうからカバンに入れるの。先生見ててあげるから自分でもう一度入れなおしてごらん。」

レッスンが終わって、生徒がピアノの譜面台にのっていた自分の楽譜をそれぞれ自分たちのカバンにうつしかえるとき、私は必ず見届けることにしている。

それぞれ、自分が今使っている楽譜の一曲一曲に没頭し、納得いくまで「自分の音楽」を深めていける子ども、そうして一曲一曲にこだわりを持って歩み続け、「自分の時間」の象徴である、その「楽譜」をいつくしみ、大切に大切にできる子ども、そんな子どもたちであってほしいと私はずっと思い続けている。

私は決してお金持ちではないが、楽譜と本だけはたくさん持っている。多分、小さな楽器店や町のその辺の図書館よりは、楽譜や音楽書をたくさん持っていると思う。思い出深い楽譜や、苦労して手に入れた珍しい楽譜も含めて、自分がその曲に出会ったことやその曲を弾いていたことで、その時々、悲しかったり辛かったりした時期の自分の人生を支えてくれた、そんな「音楽の偉大さ」の象徴ともいえる「楽譜」を、どんなに家の中が狭くなっても捨てられないで、今もなお持ち続けているのだ。そして、そのことをとても幸福に思っている。自分の人生を支えてくれた音楽、音楽を通して出会ってきた様ざまな人たち、音楽との出会い、それらの証拠品としての「楽譜」を自分の身のまわりに置いておけるなんて、何と幸福なことなのだろう。

いつだったか楽譜を買いに民主化されたばかりのプラハへ行き、しばらくしてワルシャワへ行った。日本のように、たとえば楽器店のようなところで誰もが楽譜を一冊一冊、手にとって内容を見られるのではなく、鍵がかかっているガラスケースや木の引き出しから作曲家の名前と作品を言って、いちいち出してもらうというシステムになっていて、どんなに「楽譜」というものが貴重なものなのか思い知らされた。そしてもっと驚いたのは使い古した楽譜が売りに出されていることだった。中を見ると、子ども用のピアノ・メソードなど、説明のところに赤鉛筆で何か加筆してあったり、アンダー・ラインを引いてあったり、楽譜のフレージングを鉛筆でチェックしてあったり、その子が見落としていたのであろうシャープやフラットの書き込みがあったり、説明のための鉛筆書きのイラストまで書いてあったり――。ピアノ指導者としての私には、その本を使って、その子とその先生がどのような会話をかわし、どのようなレッスンをしていたのか、手にとるようにわかってしまうほど使い古された楽譜であった。その子とその先生が、人生の大切な「時間」を「共有」した証しであるように思えた。そんな大切な「楽譜」が、売れたどの店でも何十冊も売りに出されている。気になってたずねてみたら、それらの使い終った楽譜を売って、それに少しお金を足してやっと次のテキストを買うのだという。「知識」と「技術」と「音楽性」を身につけること――頭と体と心だけで「音楽」を自分の中に残していくということであり、使ったテキストなど、かたちあるものは何も残らない。日本と違い、クラシック音楽に2～300年もの伝統があり衣食住に比べてうんとその価値も日常的なものであるはずのチェコやポーランドでさえ、使った楽譜を売って次の楽譜を買うという事実――民主化されたばかりの激動期の東欧――国そのものが今、貧しいのだと思った。愛着があったはずの楽譜を売らなければならなかったその子の気持ちを思って悲しくなった。でも、その楽譜を売ってまで次の楽譜を買っていったその子が住んでいる国の精神風土やその豊かさを思って、すぐに感動してしまった。

（北村智恵 著「エッセイ 各駅停車の音楽人」＜芸術現代社＞より　抜粋）